



2015年3月9日発行 第 **560** 号

CONTENTS

読後雑感：2015年 第6回 2
 上海街角インタビュー ㊹ 8
 【中国経済最新統計】 11



読後雑感：2015年 第6回

02. MAR. 15

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事

株式会社小島衣料オーナー

東アジアセンター外部研究員

小島正憲

1. 「最後のフロンティア ミャンマーの可能性」
2. 「カンボジアに村をつくった日本人」
3. 「ベトナムの謎」
4. 「老いの空白」
5. 「おひとりさまの終（つい）の住みか」

1. 「最後のフロンティア ミャンマーの可能性」松田健著 重化学工業通信社 2015年2月12日
帯の言葉：「成長の可能性秘める 豊かな資源、豊富な労働力 勤勉な民族性！！

カギとなる民族問題解決」

昨今の多くのミャンマー紹介本と違い、著者の松田健氏はこの本で、ミャンマーの未来をバラ色には描いていない。たとえば、松田氏は、多くの日本人から好感を持たれ、ミャンマーの救世主のように見られているスーチー氏について、

「スーチー氏はミャンマー建国の父とも言えるアウン・サン将軍の娘として、権力欲が強く、“政治家になった以上は大統領を目指すのは当然”と語っている。オバマ大統領も訪問したスーチー氏の大邸宅は兄弟で財産相続でもめているという。ミャンマーの人々が決めることではあるが、スーチー氏は大統領になる器だろうか？」と、疑問を投げかけている。

そして、「ミャンマーでは労働者の売り手市場になってしまったので、いつ転職されるかわからない不安がある。賃金も大幅に上げざるを得ない。ミャンマーに進出する日系企業間では日本語通訳の奪い合いの状況が続いている。ミャンマーでは土地代がすでに高騰して工場団地の土地代が東京の住宅地よりも高く、現在のヤンゴンのホテル、オフィス料金は、バンコクよりも数倍高い。法律面の整備の遅れ、人材欠如、通訳料金が高いことなどからミャンマー投資を諦めたり延期を決めたところもある。ミャンマーに製造業が投資するには現状の投資環境は不適合だと言わざるを得ない」と結論付けている。ミャンマーでの人手不足などについての松田氏のこの指摘は、貴重である。

それでも、そのミャンマーに、「日本企業は法の未整備で安心して契約できないなどとしてたじろぐケースが多い一方、中国や韓国企業は“法制度が未整備だからこそ融通を効かせてもらえるビジネスチャンスだ”ととらえ」続々と進出しているとして、日本企業の臆病さを指摘する。たしかにその指摘は当たっている。

松田氏はミャンマーの各地に足を運び、最近の状況を詳細に書き込んでいる。

ムーセ、モンユワ、ピー、パティン、ダウェイ、ミャワディなどの各地のレポートは参考になる。私もそれらの現地に調査に行ったことがあるが（ただしムーセとミャワディを除く）、私の眼中にはまったく入らなかった場所にまで、松田氏は足を運んでおり、驚かされた。逆に、私が強い関心を抱き、調査した場所に松田氏が行っていないこともわかり、少し気分がおさまった。松田氏はダウェイについてのレポートで、「ダウェイは海水浴もできる浅いビーチだからそこを掘って深海港を造らなくてはならないという地形的ハンディがある」と書いている。私もダウェイの現地を見たとき、ここは深海港ではないと見て取った。私は今まで、ダウェイについての調査報告で、このような指摘にはお目にかかったことがない。この点から判断して、ジャーナリストとしての松田氏の目は鋭いものだと思う。

ただし、ヤンゴン周辺の縫製工場の調査報告については、掘り下げ不足であり、事実誤認も多い。

2. 「カンボジアに村をつくった日本人」 森本喜久男著 白水社 2015年2月5日

副題：「世界から注目される自然環境再生プロジェクト」

帯の言葉：「絹織物の復興が“伝統の森”実現に至るまで」

この本は、森本氏の自叙伝のような趣の書である。本書には、京都の友禅職人であり、工房の経営者でもあった森本氏が、カンボジアの伝統絹織物に魅せられ、艱難辛苦を乗り越え、観光地シェムリアップの近くに、伝統絹織物の村を築き上げていく過程が書き込まれている。本書は染色技術などの専門的な解説などもあって、若干、回りくどい面もあるが、それを除けば、森本氏の思想と30年余の軌跡がよくわかる好著である。

森本氏は自らの立ち位置を、「援助とは、モノをあげることではない。貧しい人たちの自立を助けると言いながら、物資やお金をもらえて当たり前とばかりに口を開けて待っているだけの村びとを増やしては意味がない。人間の“欲”は大切である。それは、モチベーションそのもの、やる気につながる。しかし、貧しいことを理由に、手を動かさず口を開けて待っているだけの欲は、人間をダメにする。NGOなどが主催するセミナーや講習会のなかには、主催団体が参加者に参加費を払うケースもある。しかし、それは参加者を多く集めるだけのことに思える。多くのプロジェクトは、そのプロジェクトの実施期間が過ぎると、消えてなくなることが多い。それとも関係するよう思えるのだが、いったい誰のためのセミナーなのか、誰のためのプロジェクトなのか。わたしたちは、小さな種を提供する。ときには、その種を植えるために必要な鍬も。しかし、そのあとは村びと自身の努力が基本。だから、本当にやる気のある村びとと出会うことが大切だと考えている」と、説明している。私もまったく同意見である。

森本氏はシェムリアップで織物工房を開き、多くのカンボジア人と共に働いている。しかし本書の中では、労働者や従業員という字句はまったく出てこない。すべて「研修生」という字句で統一されている。森本氏には、工房が会社である

という意識はなく、したがって氏自身も経営者であるという意識はない。否、経営者という立場が嫌いなのだろう。それでもその工房の資金繰りは、いっさい森本氏の双肩にかかっており、工房は幾度となく財政ピンチに見舞われている。またスタッフに裏切られたり、出入り業者に騙されたり、経営者同様の苦労を重ねている。それらの苦難をはねのけ、森本氏は立派に村という共同体を作り上げた。その思想的根拠を、本文中に見出すことができる。

森本氏は1948年生まれ、つまり団塊の世代である。しかも反体制意識の強い京都生まれである。森本氏は、「十代のころ、わたしは油絵描きを目指していた。アンディ・ウォホルの複製画は、色あせながらも今もわたしの部屋にかかっている。どうしても使いたい色の絵の具を買うために、食事代を削っていた記憶もある。当時のわたしはいわゆるマセガキだった。定時制高校に通いながら、アルバイト先で知り合った自称“詩人”や絵描きの卵、3~4歳年上の大学生たちの議論の輪に加わり、“マルクス=エンゲルスの芸術論”やヘーゲルの“美学講義”などを繰り返し読んでもいた」と書いている。つまり森本氏は、当時の京都の革新的雰囲気にも育まれたのである。

先日読んだ「カンボジアで出会いたい100人」の中でも、森本氏は紹介されている。そこで森本氏は、「世界一と言われるような布を作り続ける」と決意を表明している。同時に、「先日、医者から癌だと宣告されました。そしてあと2年の命だと伝えられています。でも、治療を受ける気はないです。自然とともに自然に死ぬるように、そう考えています。一日一日、日々大切に生きる。人間は賞味期限がある生き物です。今日できることは今日やって、自分が伝えられることは、勿体つけずに伝えていきます。そうやって時代は変わっていくのですから」と書いている。潔い決意であり、私もこの森本氏の姿勢に学びたいと思っている。

3. 「ベトナムの謎」 片岡利昭著 日越貿易会 2015年1月1日

書店の棚にこの本をみつけたとき、私は、「なぜこのタイミングで、“ベトナムの謎”という題名の本が発行されたのだろうか」と不思議に思ったが、とにかく購入して読んでみた。読み終わって私は、この本には、「なぜベトナム人は中国人が嫌いなのか」という題名がふさわしいと思った。片岡氏は、「なぜベトナムは中国を嫌うのか。それは歴史をふり返って見れば一目瞭然である。すなわち、ベトナムと中国との関係は、紀元前の秦による征服からはじまり、その後も、ベトナムは中国で強大な王朝が建国されるたびに、その存在におびえ、また侵略の脅威にさらされつづけた。そのため、それに抵抗して戦うか、友好を装って朝貢するのか、の歴史を繰り返してきたのである」、「すなわちベトナムの歴史とは、中国との抗争の歴史そのものなのである」と、本書のおよそ半分を割いて中越抗争の歴史を書いている。おそらく片岡氏は本書で、昨年の南シナ海における中越紛争の結果の、反中暴動の根底を解明したかったのであろう。その点で、本書はその目的を達していると思う。

ただし、片岡氏はよほど発行を急いだのか、この本には校正不足が目立つ。主語があいまいであったり、助詞の使用法が独特であったり、いささか文意が通じないところがあったり、また脱字や余計な字を数えると10箇所を越している。さらに同一事象を二通りの字句で書く（「ボーグエンザップとヴォーグエンザップ」、「民号作戦と明号作戦」）など、読者の頭を混乱させるような記述もある。あるいは、「散を乱して逃げまどう」という記述があるが、「算を乱して」が正しいと思う。また「隠密裏に」という字句がなんども使われているが、「秘密裏に」、「極秘裏に」という字句も出てくる。読者にとっては、そのニュアンスの違いを理解することが難しい。私はこの本を読むのに、なんども辞書を引き、自分の頭を疑いながら読んだ。著者の片岡氏には、再度、この本を校正していただいて、読みやすい本にさせていただきたいと願う。

4. 「老いの空白」 鷺田清一著 岩波現代文庫 2015年

帯の言葉 : 「〈古い〉はほんとうに、“問題”なのか？」

著者の鷺田氏は哲学者である。だから私は、この本から、超高齢化社会の哲学的解を学ぶことができると思った。しかし、この本で鷺田氏は、それに真正面から回答していない。かつて赤瀬川原平氏は「老化現象」を「老人力」と茶化して言い換えることによって、高齢者にその行く末を真剣に検討することを回避させ、先延ばしさせた。鷺田氏のこの本での主張は、あの赤瀬川氏の言葉に、高尚な衣を着せたようなものだと思う。また鷺田氏は、「現役をリタイアした後、長い時日を過ごすのは人類初めての経験なのに、その文化はまだ空白のまま。未曾有の超高齢化時代を迎え、“古い”に対する我々の考え方も取り組み方も変化せざるを得ないのに、“古い”が“問題”としてしか論じられてこなかったことこそが問題なのである」と書き出しているが、高齢者をめぐる状況は、もはやその段階を通り過ぎ、「老いの空白」ではなく「死に臨む思想」を哲学的に解明しなければならない時期に差し迫っているのである。この問題の解は、もはや先延ばしすることはできない。

鷺田氏は、「未曾有の高齢化社会を迎えて、人々は人類史がこれまで経験したことのないような人生の一段階を生き抜かねばならないようになった。平均寿命が格段に伸びて、老後が人生のおまけではなく、壮年期と同じくらい長い期間となり、その時期をどう過ごすかということがこの時代を生きるときの最重要課題のひとつとなった。当然、過去に範型を求めるわけにはいかない」と書いている。この認識は間違いではなく、「老年期をいかに過ごすか」は、多くの高齢者にとって重要な課題ではある。しかし現在、多くの超高齢者が老年期を通り過ぎ、死の領域の寸前で、心構えのないまま無防備で立ち尽くしており、彼らに「死に臨む思想」や「死に方の思想」を授け、引導を渡してやることの方が、もっと重要である。

鷺田氏は、「老人と子どもという両極の存在は、たしかにともに、セルフ・ケアが十分にはできない。つまり他人の世話にならざるを得ないという点で相似的

である」と捉え、「幼き者が幼いものとして幼いままに輝ける社会、老人が老人としてのそのあり方に十分な意味を見出せる社会、そういう社会こそ“成熟した社会”と言えそうだ。いいかえると、子どもが一日も早く“大人”の世界に参入することを求められるのではなく、子どものままで子どもとしてのあり方を教授できるような社会、老人が老人として大人の世界から退場してゆくのではなく、“老い”の時期としての時間に重要な意味を見出しながら生きてゆける社会、それが社会の成熟というものではないか」と書いているが、具体的な記述がなく、私にはその真意がよくわからない。つまり「老いの空白」を埋める具体的な手立てについて、この本から学ぶことができないということである。

また生物がその誕生以来、持ち続けている幼年期と、直近の人類のみが持つことになった老年期を、相似的として生物界の原則のように捉え、哲学的解明を試みようとするのは、無意味であると思う。人類以外の生物には、壮年期のあとには死が待っているのみで、長い老年期はあり得ないからである。最近では、犬や猫のペットが長生きするようになり、痴呆犬や寝たきり猫が問題になってきてはいるが。

5. 「おひとりさまの終（つい）の住みか」 中澤まゆみ著 築地書館 2015年2月10日

副題：「自分らしく 安らかに 最期まで暮らせる 高齢期の“住まい”」

帯の言葉：「自分の“住まい”と親の“住まい”、どこで安心して死ぬのだろうか。」

人生100年時代の“終の住みか”は、自宅、高齢者住宅、それとも“とも暮らし”？」

本著で中澤氏は、日本中の高齢者の「住まい」と「死に場所」を徹底的にリサーチし、具体的に紹介している。しかもここには上掲の鷺田氏が解明しようとしている「老いの空白」時期の「住みか」が、一般高齢者にとって、政治とビジネスの狭間で、きわめて複雑怪奇になってしまっている様子が、詳細に書き込まれている。中澤氏は、「大きな課題となっているのが、高齢期の“住まい”と“死に場所”だ。“在宅”の選択肢としては、自宅、有料老人ホームをはじめとする高齢者住宅、認知症グループホームがあるが、自宅では家族の介護負担、高齢者施設ではケアの質などの問題があり、介護を支える介護職員も在宅医療を支える訪問看護師も、圧倒的に足りていない。そうした中で、私たちが安心して自分らしく死ぬ場所を見つけるには、これまでのような“おまかせ”ではなく、自分なりの“住まい方”と“しまい方”をおのおのが考えながら、現状を変えていくための知恵を当事者・住民の視点から出していく必要がある」と書いている。

中澤氏は、「団塊の世代が“後期高齢者”の仲間入りをする2025年には、3人に1人が高齢者、その約4割がおひとりさまになると推計されている。そこで問題になってくるのが、“人生の終わり”を迎える場所”であるといい、「“元気なうちは自宅、入院や介護が必要になったら病院か施設”というこれまでの高齢期の“住まい方”は、これから大きく変化していくことになる。背景にあるのは、増え続ける医療費と介護費を削減するために、国が推し進めている“病院から在

宅へ” “施設から在宅へ” の流れだ」と書いている。そして「高齢者住宅や施設を“終の住みか”にするには、認知症になっても安心して暮らせ、そこでも“看取り”ができるところを探すことが条件だ」と続け、それらを満足させるような具体的物件を、金銭的な面も含め、数多く紹介している。

最近では、都会か田舎かを問わず、老人施設がよく目につくようになってきた。計算上では、2025年には、この数倍の老人施設が立ち並ぶことになり、このまま行くと、日本の景色が一変することになるかもしれない。そしてそのことが、否応なしに、高齢者の思想を変えていくに違いない。しかしその前に、中澤氏の言うように、われわれは、「“おまかせ”ではなく、自分なりの“住まい方”と“しまい方”をおのおのが考えながら、現状を変えていくための知恵」を出し、積極的に「老いの空白＝住まい方」に立ち向かい、「死に臨む思想＝しまい方」を確立し、超高齢化社会を乗り切る日本発新思想を世界に発信すべきである。

以上

上海街角インタビュー ⑦⑩

社団法人大阪能率協会アジア・中国事業支援室副室長（海外委員）

順利包装集团董事长（在上海）

福喜多技術士事務所所長

福喜多俊夫

国内旅行は好きですか？

中国のニュースを読むと、春節に大勢の人が海外や国内旅行を計画している。出稼ぎで都会へ働きに来ている人は帰省するが、上海人は春節と国慶節の長期休暇が旅行のチャンスである。日本の新聞には中国人の海外旅行での消費額ばかりが話題になるが、中国国内の名所旧跡を訪ねる旅も政府は大いに奨励している。上海人は海外旅行によく出かけることは以前のインタビューで分かったが、国内旅行にも興味があるのだろうか？

1. 50歳代前半の男性

旅行は好きですが、時間とお金の関係であまり行けません。中国ではまだ、有給休暇の制度が外国に比べて整っていないので（入社1年で5日、以降1年に1日増えて、10年勤続で10日というのが普通）、みんな連休の時に集中します。連休はどこへ行っても人があふれるほどいるので避けたほうがいいです。国内旅行なら名所旧跡よりチベットとか新疆ウイグルなど自然を楽しめるところへ行きたいです。しかし、去年はどこへも行けませんでした。今年も出来そうにありません。というのは、私のような年齢になると両親の健康がすぐれないことが多く、介護に時間を取られます。旅行は定年になってからの楽しみに取っておきます。会社でも旅行で休暇を取るの若い人です。

2. 40歳代中頃の女性

私はいわゆる名所旧跡を訪ねる観光旅行は好きではありません。一カ所でのんびりする旅が好きです。私は結婚後、仕事を除いて海南島以外には行ったことがありません。

ハルビンには一度行きたいと思っているので、来年には冬のハルビンへ行こうと思っています。

私の同僚や知人はよく国内旅行をするようになりました。特に夏は大連、青島、海南へ出かけて行きます。上海人は殆どの人が沿海部を訪れているので、最近では西部や北部へ行く人が多いです。

3. 30歳代中頃の女性

去年は同僚と二人で、青海省と新疆ウイグル自治区へ行きました。中国東部の

景色には飽きたので、全く違う景色が見たくて、インターネットで調べてルートや宿を選びました。私は旅行するときはチケットも宿も自分で手配します。でも、私の両親の年代の人はパック旅行の方が楽だといってツアーに申し込んでいます。上海にも国内旅行のツアー会社がたくさんありますよ。

4. 20 歳代後半の女性

私は国内旅行より海外旅行に興味があります。お金が溜まったら海外旅行です。お金がないから国内旅行という考えは無いです。今、妊娠しているので今年は海外旅行もなしです。2～3年は子育てに専念します。

5. 30 歳代前半の女性

中国は広大な国です。いろいろな景色が楽しめる国です。国内を旅して周るのはとても楽しいことだと思います。しかし、中国で旅を楽しむ為には大きな問題があります。それはあまりにも大勢の国民がいることです。観光地では休日だけでなく、週日でも人が溢れています。もう一つは地方政府の金儲け主義です。多くの観光スポットは地方政府の重要な収入源になっており、年々入場料や拝観料を上げています。

昨年は江西省へ行きました。ご存じですか？ 景徳鎮で有名な場所です。井冈山革命根拠地や世界遺産、廬山があります。今年はまだ、何処へ行くか決めていません。

6. 20 歳代中頃の男性

旅行は今や若者の日常生活の一部です。3日間の連休には友達と車で周辺の観光地へ出かけます。長い休みには西部や東北へ出かけます。プランは全部自分で作りますが、チケットと宿だけ予約して出かけます。ただ、プランは行った先でしばしば変わります。海外旅行はなかなか手が出ないから、国内の貧乏旅行を楽しんでいます。

7. 40 歳代中頃の女性

私は国内旅行には全く興味がありません。でも、子供が小学校へ行くようになって、学校でいろいろな土地や歴史の勉強をするようになると、実際にそこへ連れて行ってやる必要が出てくると思います。主人は年に一度は国内の歴史的な場所に出かけるようにしようと言っています。

8. 40 歳代前半の男性

私は仕事で上海近郊だけでなく、山東省や東北三省、内モンゴルなどに行くので、国内旅行をわざわざやりたいとは思いません。子供は高校生ですが勉強に忙しくて旅行どころではありません。両親も老いてきて介護が必要になっているし、まあ、当分旅行はなしですね。

9. 20 歳代前半の女性

長い休みは海外旅行へ出かけますが、短い休みは一泊二日か二泊三日で国内旅行です。二泊三日であればかなり遠くまで行けます。内蒙古や新疆は有給休暇を一日取って行ってきました。去年、海外は沖縄、国内は新疆ウイグルへ行きました。新疆ウイグルのウルムチやトルファンは上海と全然違うから面白かったです。今年は九寨溝へ行く計画をしています。旅は海外も国内も楽しいです。

10. 40 歳代中頃の女性

国内旅行はよく行きます。家族旅行です。主人も子供（小学校3年）も旅行が好きなので、ネットで行き先を研究します。行くまでのプラン作りの時間も楽しいです。行き先が決まると主人がその土地をいろいろ調べるので、私も子供も知識が増えます。中学へ行くようになると勉強が忙しくなるから、いまのうちに大いに家族旅行を楽しみます。

中年の女性には国内旅行に興味がない（海外旅行には大いに興味がある）人が多かったが、若者は大いに旅を楽しんでいるようだ。しかし、中国でも介護世代になると自由度がぐっと下がる。

オンライン旅行会社の中国最大手・携提旅行網が1月末に行った「2015年春節・中国人の旅行願望調査」によれば、「2015年春節連休には旅行に行きたい」と答えた回答者は8割近くに達し、例年の割合を大きく上回った。ただし、国内旅行はどこも混み合っているため、「海外旅行を計画している」とした人が5割以上を占めた。旅行の予約方法に関しては、「旅行関連サイトを通じて、旅行商品を比較検討し、選択する」とした人が8割を上回った。業界専門家は、「海外旅行のハードルが低くなり、また、高速鉄道・自家用車・飛行機を使った国内旅行が簡便化し、ネット上の旅行技術の革新や価格競争など、旅行者に大きな利益がもたらされる要因によって、中国人の旅行願望は更にグレードアップされるだろう」との見方を示している。（人民網1月22日）

以上

【中国経済最新統計】

	① 実質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加価値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億ドル)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2012年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
12月	7.9	10.3	15.2	2.5	18.8	316	14.0	6.0	-7.8	-4.5	14.4	15.0
2013年	7.7	9.7	11.4	2.6								14.1
1月				2.0	20.8	291	25.0	29.0	-12.4	-3.4	15.9	15.4
2月				3.2		153	21.7	-14.9	-35.6	6.3	15.2	15.1
3月	7.7	8.9	12.6	2.1	21.5	-9	10.0	14.2	-19.7	5.7	15.7	14.9
4月		9.3	12.8	2.4	19.8	182	14.6	16.6	13.9	0.4	16.1	14.9
5月		9.2	12.9	2.1	19.7	204	0.9	-0.1	-14.4	0.3	15.8	14.5
6月	7.5	8.9	13.3	2.7	19.9	271	-3.3	-0.9	-17.3	20.1	14.0	14.1
7月		9.7	13.2	2.7	20.2	178	5.1	10.8	1.2	24.1	14.5	14.3
8月		10.4	13.4	2.6	21.4	285	7.1	7.1	-11.7	0.6	14.7	14.1
9月	7.8	10.2	13.3	3.1	19.6	152	-0.4	7.4	-16.8	4.9	14.2	14.3
10月		10.3	13.3	3.2	19.2	311	5.6	7.5	-8.2	1.2	14.3	14.1
11月		10.0	13.7	3.0	17.6	338	12.7	5.4	-9.3	2.3	14.2	14.2
12月	7.7	9.7	13.6	2.5	17.2	256	4.3	8.6	-3.4	-42.6	13.6	14.1
2014年												
1月				2.5	19.8	319	10.5	10.8	-8.6	-4.5	13.2	14.3
2月				2.0		-230	-18.1	10.4	1.3	4.0	13.3	14.2
3月	7.4	8.8	12.2	2.4	17.3	77	-6.6	-11.3	6.1	-1.5	12.1	13.9
4月		8.7	11.9	1.8	16.6	185	0.8	0.7	0.5	3.4	13.2	13.7
5月		8.8	12.5	2.5	16.9	359	7.0	-1.7	8.4	-6.6	13.4	13.9
6月	7.5	9.2	12.4	2.3	17.9	316	7.2	5.5	10.3	0.2	14.7	14.0
7月		9.0	12.2	2.3	15.6	473	14.5	-1.5	14.0	-17.0	13.5	13.4
8月		6.9	11.9	2.0	13.3	498	9.4	-2.1	5.2	-14.0	12.8	13.3
9月	7.3	8.0	11.6	1.6	11.5	310	15.1	7.2	9.4	1.9	11.6	13.2
10月		7.7	11.5	1.6	13.9	454	11.6	4.6	8.7	1.3	12.1	13.2
11月		7.2	11.7	1.4	13.4	545	4.7	-6.7	-8.6	22.2	12.0	13.4
12月	7.3	7.9	11.9	1.5	12.6	496	9.5	-2.3	6.1	10.3	11.0	13.6
2015年												
1月				0.8		600	-3.3	-20.0	2.2	-1.1	10.6	14.3

- 注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、（ ）内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。